

(見学会)

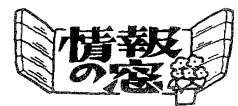
見学先、東北石油へ向かいました。東北石油での案内説明の中で、東北地域の各メーカー直営ガソリンスタンド事情が個人的に興味深い話でした。それにも増して、東北石油側の案内に加え、折々元社員の高井先生（静岡大学）からのコメントがあり、内容の濃い案内を受けました。

次に麒麟ビール工場に移動し、早速試飲ビールで喉をうるおし、一服して見学コースに入りました。しかし残念なことに当日は作業定休日で、工場内は全く静かでした。そのため、ガイドさんの説明や要所に置いてある説明用ビデオがよく聞こえました。その後ピアポート（レストラン）に移動し、上等な牛タン定食（ビール付き）の昼食を頂きました。ここで2つの疑問が解けました。1つは参加費がやや高額な4千円

だったこと、もう1つは、バスの座席が40人ほどあったのに、なぜ参加者上限が20名強だったか？ それは、このレストランの予約席の制限のためと納得しました。最後に、東北電力仙台火力発電所に伺い、鮎の養殖を含め社内見学し、和やかに帰路につき、15時すぎ仙台駅東口で解散となりました。

最後になりましたが、本稿を執筆するに当たり、石川氏（岩手大学）、中塚氏（東京都立大学）、日下氏（東京都立短期大学）、吉岡氏（弘前大学）、山下氏（東北大学）、武藤氏（東京工業大学）、古藤氏（東北芸術工科大学）、荻野氏（コンサルタント）の諸氏にご協力頂いたことを申し添えるとともに、感謝申し上げます。

第39回シンポジウムルポ



枇々木 規雄（慶應義塾大学）

春季研究発表会に先立って、5月26日（火）仙台市青年文化センターにおいて、第39回シンポジウムが「コンピュータ、教育、OR」のテーマで開催されました（参加者39名）。日本OR学会、情報処理学会、現役の高校の先生というあまり共通点のない（と思われた）3者が集まった会合でした。ORを素材に数理科学的考え方のおもしろさを伝える方法と情報教育のコンテンツを充実させる方法を探るための5つの講演が行わ

れました。

最初の講演は、武井恵雄氏（帝京大学）の「情報教育の意義」でした。「すべての教育は生涯学習の入口」であり、情報活用能力を持っていれば、「自らが学びたいときに学びたいことを学ぶことができる」ので、学校教育を基本的なりテラシー教育だけにし、ゆとりのあるものとする必要があると述べました。また、これは「情報教育が教育改革につながる」ことになると

述べました。情報活用能力について「情報活用の実践力」、「情報の科学的な理解」、「情報社会に参画する態度」を情報リテラシーの3要素として構造的な図を提示し、その重要性について述べました。

第2番目は「100校プロジェクトの経験」と題して、井口巖氏（東北学院中学高等学校）が講演されました。まずはじめに、ホームページでリンク集を作り、お互いに授業などで使える問題を公開し、共有することから始めました。さらに、インターネットを活用したディベートを東北地方の5校で行った成果を話されました。教師の役割は「知識の伝達者であるとともに、プロジェクトのプロデューサーでなければならない」と述べられました。最後に、授業に使える教材をインターネットで公開していくことを提案されました。「高校生のためのOR」特集号の記事をインターネットで公開するなど、この提案に応える必要があると思いました。

第3番目は、逆瀬川浩孝氏（早稲田大学）による「見せるOR教材」でした。はじめに、「EXCELを使えば、自然にORを教育できるように」との考えから『ORとEXCEL』という標語(?)を提案されました。高校生のためのOR研究部会での活動や教材の紹介が行われました（OR誌96年3月号、97年12月号をご覧ください）。「教材は役に立つのか？」の問いから、高校生を相手に実際に「ランダム回答法」の出前授業を行った様子を話されました。「話せば分かる」（逆に、話さなければ分からない）ことが分かったと述べました。最後に（タイトルを少しもじって）、「魅せるOR教材」を開発し、普及させることの重要性を説明しました。

第4番目は逆瀬川先生が出前授業にも行かれた和歌山県立日高高校の嶋田佳一氏による「高校教育・数

学・OR」でした。数学が現実の問題と切り離されていると述べ、自然科学科の実験数学で行った10円玉の標本調査の授業や微分方程式の話とコーヒーの冷め方によって行った授業の話がされました。96年3月に和歌山県田辺市でのシンポジウムでORと出会い、そのときに「(ORの教材が)これが探していた教材だ」と感じたそうです。このシンポジウムの様子についてはOR誌96年5月号をご覧ください。また、若山邦紘先生（法政大学）と逆瀬川先生による出前授業での生徒の感想も紹介しました。最後に、「高校生のためのOR」で取り扱われている話題の中に、高校生にも通用する科学的な裏付けの必要性を感じる話題も欲しいと注文されました。

最後は、「プロジェクト教育とOR」と題して、森村英典氏（東京工業大学名誉教授）が講演されました。まずはじめに、日本ではプロジェクト教育が少なすぎることが創造力を育てることのできない一因であり、そのプロジェクト教育の題材として、ORの出番がまわってきたと述べました。題材の1つとして、約25年間行ってきた「データ収集」の授業の内容を紹介しました。さらに、プロジェクト教育とともにバズル教育の意義についても述べました。最後に、OR教育とモデルの関係について「モデルを作るということは、事の本質を抽象することであるから主体的な思考を必要とし、同時に多面的な感覚を養うのに役立つ」と述べました。

今回のシンポジウムは「未来の大学生」である高校生の教育を共通点にした有意義な講演や議論がなされたと思います。T教授によると、参加した高校の先生とシンポジウム終了後に懇親会を行い、盛り上がったとのこと。東北地方からも「出前」の注文が来るかもしれません。



(シンポジウム風景)